

一一 緊急発掘調査された集落遺跡

久保地区

ほ場整備前の上久保集落の西側の地形は、幅四〇〇メートルに及ぶ台地状の地形に見えたが、試掘調査の結果によって南北両縁辺の間に東西方向の谷が走っていたことがわかった。古墳時代の堅穴式住居は、その谷によって分けられた南北の稜線上でそれぞれ確認できた。特に北側の稜線上は標高四四メートルの最西端の大久保原田遺跡から標高三〇メートル最東端の大久保四反畑遺跡まで六〇〇メートル以上の範囲で古墳時代の堅穴式住居が分布しているものと考えられる。この稜線上で六カ所の調査区を設定したが、ほぼ中位にあたる大久保明神遺跡・大久保小田遺跡でもっとも住居跡の密度が高い。逆に南側の旧谷筋に近い京手遺跡では住居がみられなかった。つまり、稜線上の平坦面に集落を営んでいる可能性が高い。大久保明神遺跡付近では宇田川に向かって五メートルほどの落差がある。各遺跡で検出した古墳時代の堅穴式住居跡の数は表2-15のとおりである。ただし、各住居跡出土土器の検討が完了していないので、カマドないしその痕跡をもつものと出土遺物から判明しているもの以外は除外している。そのため、実際の住居数は更に多いものと考えられる。カマド付きの住居跡の例を見ると、ほとんどのものが一辺四く五メートルの正方形に近いプランで、主柱穴は四本である。北側に近い辺の壁際中央にカマドを設けてお

ほ場整備前の上久保集落の西側の地形は、幅四〇〇メートルに及ぶ台地状の地形に見えたが、試掘調査の結果によって南北両縁辺の間に東西方向の谷が走っていたことがわかった。古墳時代の堅穴式住居は、その谷によって分けられた南北の稜線上でそれぞれ確認できた。特に北側の稜線上は標高四四メートルの最西端の大久保原田遺跡から標高三〇メートル最東端の大久保四反畑遺跡まで六〇〇メートル以上の範囲で古墳時代の堅穴式住居が分布しているものと考えられる。この稜線上で六カ所の調査区を設定したが、ほぼ中位にあたる大久保明神遺跡・大久保小田遺跡でもっとも住居跡の密度が高い。逆に南側の旧谷筋に近い京手遺跡では住居がみられなかった。つまり、稜線上の平坦面に集落を営んでいる可能性が高い。大久保明神遺跡付近では宇田川に向かって五メートルほどの落差がある。各遺跡で検出した古墳時代の堅穴式住居跡の数は表2-15のとおりである。ただし、各住居跡出土土器の検討が完了していないので、カマドないしその痕跡をもつものと出土遺物から判明しているもの以外は除外している。そのため、実際の住居数は更に多いものと考えられる。カマド付きの住居跡の例を見ると、ほとんどのものが一辺四く五メートルの正方形に近いプランで、主柱穴は四本である。北側に近い辺の壁際中央にカマドを設けてお

表2-15 久保地区集落遺跡の住居跡数

番号	遺跡名	カマド付住居跡	総柱建物
1	大久保四反畑遺跡	5軒	2棟
2	〃 五反畑遺跡	14	7
3	〃 小田遺跡	11	2
4	〃 明神遺跡	34	9
5	〃 京手遺跡	0	2
6	〃 原田遺跡Ⅰ	1	3
7	〃 原田遺跡Ⅱ	4	0
8	〃 今地遺跡	4	1



図2-174 久保の古墳時代集落 (1/20,000)



写真 2—26 明神遺跡

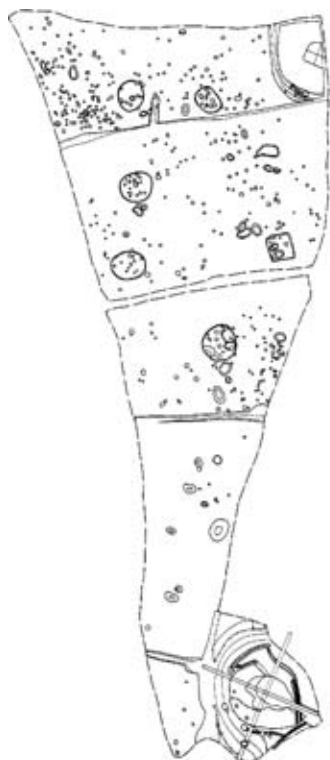


図 2—176 原田遺跡 (1/1000)



図 2—175 京手遺跡 (1/1000)



図2—178 五反畑遺跡 (1/1000)



図2—177 小田遺跡 (1/1000)

り、まれに住居外へと伸びる煙道を残すものが見られるが、上部構造が削られたためか基本的にカマドの奥が住居のプランから突出することはない。カマドが使用時のまま残っていると判断できるものは少なく、構築するに足る粘質土も量的に十分残っていないため住居を放棄する際に意図的に破壊したものと考えられる。ただし、カマド本体に対し石製や土製、土器を転用した支脚が残されている場合があるので何らかの規則性があるのかもしれない。

住居跡の主軸方向は最低二つのパターンがあるようであるが、両者の切合い関係は少ない。調査時の所見では大久保五反畑遺跡の例を除き、古墳時代の住居跡から出土した遺物は基本的に六世紀の後半に収まるものと考えている。五反畑遺跡の住居跡には五世紀代に遡るものが存在するようであるが、連続した前後の時代の遺構や遺物が見つかっておらず、この地に集落が営まれたのは比較的短期間であると考えられる。

他方、谷を挟んで南側の丘陵では東端近くに大久保今地遺跡があり、住居跡四軒を検出している。これらの住居跡は残存状況が悪く、更に多くの住居があった可能性が高いが詳細は分からない。ただし、近辺で耕作土が除去された状況を観察する機会があったが、住居跡と見られる方形プランの遺構が確認でき、集落が更に西方向に伸びているのは確実である。

## 諫山地区

やはり、  
ほ場整備

に伴う発掘調査により長  
峡川上流の矢山川沿いの  
岩熊地区の二地点で住居  
跡を確認している。どち  
らも標高四七<sup>ミ</sup>台の地点  
である。長峡川流域の久  
保地区より上流域では緩  
斜面の場所で試掘調査を  
行っても砂礫層や泥層に  
あたることが多く、旧流  
路の痕跡が畦畔にも残っ  
ており、一帯が氾濫原で  
あったことがわかる。こ  
の二遺跡も砂<sup>ク</sup>シルト質  
の軟弱な堆積層に掘り込  
んで住居を築いていたた  
め、遺構の残りが非常に  
悪かった。

矢山川東岸の岩熊栗屋<sup>くりや</sup>  
遺跡ではカマド付き竪穴



写真2-27 岩熊栗屋遺跡



写真2-28 岩熊古江遺跡

式住居跡二軒、二間×二間の総柱建物跡四棟を検出した。住居跡は一辺四<sup>ミ</sup>前後で正方形に近いプランである。遺物は六世紀後半と中世のものが中心であった。

小倉山の南側裾にあたる岩熊古江遺跡では、竪穴式住居跡八軒、二間×二間の総柱建物跡四軒を検出した。こちらの住居跡は一辺四<sup>ミ</sup>五<sup>ミ</sup>前後で、若干長方形に近いものも見られる。いずれの遺跡でもカマドは北側に近い辺の中央壁際に配置されている。住居跡は接近しており全てが同時に営まれたとは考え難い。

## 黒田地区

黒田地区の古墳時代集落は二つの類型に分けられるようである。一つは小河川によって生じた

微高地上に立地するもの、もう一つは群集墳を築いた山裾に集落を営むものである。前者は黒田八田ヶ坪遺跡(1)・イモジ遺跡(2)・持田遺跡(3)、中黒田遺跡(8)、下原出口遺跡(10)、エノヲ遺跡(11)である。前の四遺跡は橋塚古墳と同一の微高地に立地する。橋塚古墳との距離は黒田八田ヶ坪遺跡東端で約一〇〇<sup>ミ</sup>、中黒田遺跡では七〇<sup>ミ</sup>前後にすぎない。これらの遺跡では四三軒のカマド付きの住居跡が検出されている。そのうち五軒が住居跡の隅にカマドを作っている。隅カマドの住居跡はほかの住居跡に比べ床面積が小さくなる傾向があり、主柱穴が見つかったのは一軒だけである。また、持田遺跡で検出した住居跡は平面のプランが南北方向に長い長方形で、東側長辺にカマドを設ける

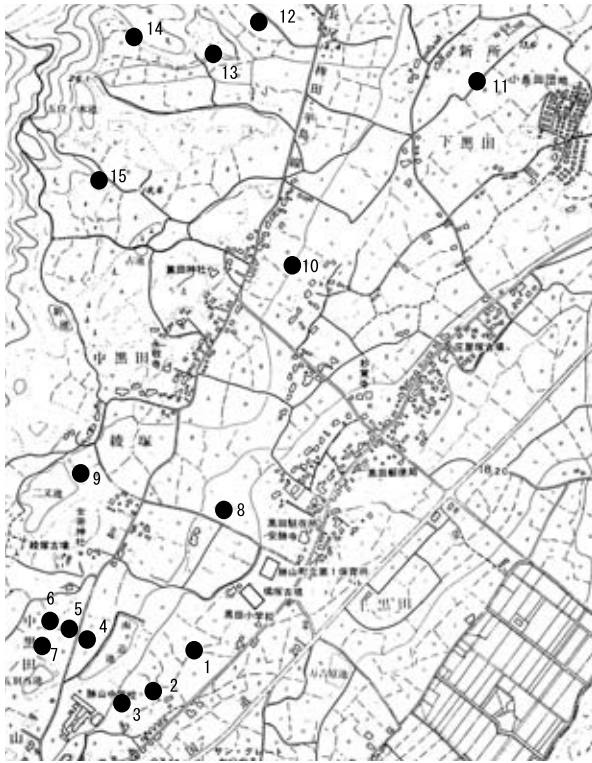


図2—179 黒田の古墳時代集落

特殊なものであった。八田ヶ坪遺跡第二地点は第一地点の北側にあたり、地元の人々の話では勝山中学校横にある新池を築く際に大きく削平したとのことで住居跡は検出できなかったが、二間×二間の総柱建物を検出していることから同一集落であろう。出土遺物の検討を待たねばならないが集落が営まれた時期は六世紀後半のどこかに中心をもつと考えられる。橋塚古墳という首長墓との関係が非常に興味深いところである。

また、黒田下原出口遺跡と黒田エノヲ遺跡はこれらの遺跡が



写真2—29 持田遺跡



写真2—30 八田ヶ坪遺跡



図2—181 八田ヶ坪遺跡2 (1/1000)

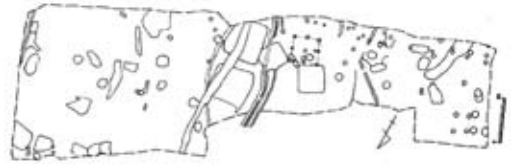


図2—180 イモジ遺跡 (1/1000)



図2—182 中黒田遺跡 (1/1000)

立地する微高地から北北東に約七〇〇メートル離れた別の微高地にある。下原出口遺跡は弥生時代後期から一部古墳時代初頭にかけての住居跡群が中心であるが、三六軒の竪穴式住居跡の内二軒にカマドが設けられている。その東方に続く黒田エノヲ遺跡は弥生時代中期を中心とした集落遺跡であるが、二三軒のカマド付き住居跡が存在し、うち二軒が隅カマドである。ただし、これら古墳時代の住居跡の

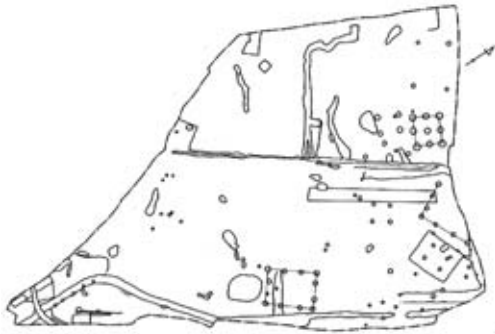


図2—183 神田遺跡 (1/1000)

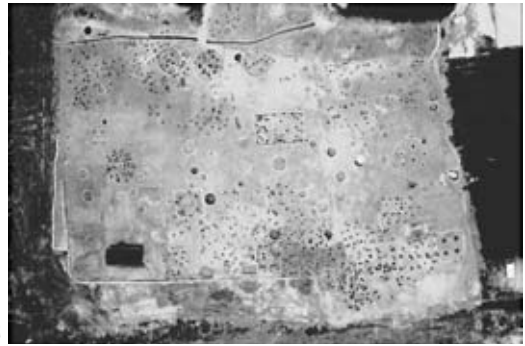


写真2—31 エノヲ遺跡

大半は調査区南西の一角で高密度に検出されたものである。

二つめの類型は黒田神田遺跡(4)、畑堀遺跡(5)、松ヶ迫遺跡・平田遺跡(6)、平原遺跡第一・二地点(7)、黒田二又遺跡(9)といった山裾の緩斜面部分に営む集落である。これらの遺跡の山側には勝山古墳群・小堤池南古墳群・小堤池北古墳群が控えている。これらの遺跡が立地するのは先の八田ヶ坪遺跡などがある微高地から谷一つ挟んだ北側山裾一帯である。最も南側の黒田神田遺跡でカマド付き住居跡一軒と二間×二間の総柱建物を検出したのははじめとし、あわせて三一軒の住居跡を検出している。

平田遺跡と隣接する平原遺

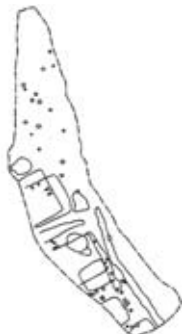


図2—186 沓ヶ坪遺跡 (1/1000)



図2—185 蔵本遺跡 (1/1000)



図2—184 久保田遺跡 (1/1000)

跡では合わせて一三棟の二間×二間の総柱建物棟一〇軒をほぼ等高線に沿う形で検出した。更に西方の平原第二地点でも六棟の総柱建物跡が山裾の傾斜変換点近くに点在する。

同様に丘陵裾に分布しながら、これまであげた遺跡より若干傾斜が強い位置に住居を築いているのが黒田久保田遺跡(11)、蔵本遺跡(13)、沓ヶ坪遺跡(12)である。これらの遺跡は古墳群が立地する二つの突出した尾根筋周縁の谷部に分布している。北側の尾根筋には



図2—187 松ヶ迫遺跡 (1/1000)

三ツ塚古墳群、南側には寺田川古墳群、更に谷の深奥部には三〇基以上存在するとされる五位ノ木池西古墳群が分布している。これらの遺跡は現在水田となっている地形のもつとも山際にあたり、谷側は開墾により失われているため本来の範囲は分からない。久保田遺跡で一軒、蔵本遺跡第一地点で三軒、同第四地点で四軒のカマド付き住居跡が検出されている。久保田遺跡では主柱穴を確認できなかったが他では四本柱で、カマドの位置の基準は方位ではなく山側に設けるようである。また、久保田遺跡で三棟、蔵本遺跡でも三棟の二間×二間の総柱建物跡を検出している。

三塚古墳群が立地する丘陵の西側の谷にも伊龍遺跡が立地する。こちらの谷は前の遺跡群が分布する地点に比べ谷幅が広く遺跡の地形も緩斜面で神田遺跡等の立地条件に近い。カマドを確認した住居跡は一軒で、正方形プランの四本柱である。カマドは、山側ではなく北側辺の中央に配されている。